

農業技術の向上を

目指して

農業技術の向上や効率化を図るための様々な取り組みが行われています。

5月8日には、町主催による田植え作業の省力化を目的とした現地見学会が森啓介さん(字中須田)倉庫で行われ、農業者や関係機関など25名が参加しました。

この日は、農機具メーカーが水稻の苗床の高密度化について実際の機械を使いながら説明し、資材の削減や、従来の機械を活用できることなどが話されると、参加者は熱心に聴いていました。

また、5月14日には、町主催の青年農業者学習会が役場庁舎で開催され、7名が参加しました。

この学習会では、昨年、オランダやドイツ、イタリアの農場を視察した森優人さん(字中須田)が欧州の農業事情について報告し、「日本より機械化が進んでおり、効率的な農業経営が行われていた」と話されたほか、作物の栽培管理方法や農業機械についての情報交換が行われていました。



児童、米作りの一端を学ぶ



5月15日、目名沢地区の水田において上ノ国小学校5年生21名が、代掻き体験を行いました。

これは地域の産業を学ぶ総合的学習の一環として、米作りの一連作業を体験するもので、菊池和雄さん(字北村)の協力を得て行われました。

代掻きとは、水田内に水を張り、土の塊を砕き平らにならす作業のことです。児童は、作業のため水田に足を踏み入ると最初は「冷たい」など話していましたが、慣れるに従ってトンボを元気に引いていました。

なお、田植え体験を24日に実施しており、順調に生育すると9月下旬には、収穫体験が行われるとことです。

群衆を賑い

ニシンの稚魚が放流される

5月21日、ニシン資源の復興を図ろうと檜山管内水産振興対策協議会(工藤昇会長)が主体となつてニシンの稚魚16万6000匹を上ノ国漁港(上ノ国地区)で放流しました。

この取り組みは、檜山地域沿岸で合計100万匹のニシンの稚魚を放流する事業として平成24年から実施しており、この間、上ノ国においてもニシンの水揚げ量が徐々に増えるなど着実に成果を上げています。

この日放流された稚魚は早ければ3年ほどで帰るとのことです。資源量が増えることで群衆が見られるのではないかと期待が寄せられています。



昨年の水揚げを大きく上回る

上ノ国周辺のマス漁

4月上旬から上ノ国町海域で行われたサクラマス漁が好調に推移しました。

近年のサクラマスの漁獲量は、その好不調の波が激しいですが、今年は5月17日現在で5.2トンと昨年1年間の漁獲量を4.7倍上回っています。

取材当日の5月11日は、しけ模様だったことから漁獲量は少なかつたものの、水揚げした久末巧さん(字大崎)は、今年は体高があり、「3キロから5キロの非常に大きいものが漁獲されている」とのことでした。

水揚げされたサクラマスは町内のスーパーの店頭に並んでいます。なお、この漁は5月下旬まで行われます。

